

え・が・お

つくばみらい市立谷井田小学校 学校便り

平成26年11月4日 NO. 7

つくばみらい市立谷井田小学校 文責：渡 辺

すっかり秋が深まりました・この季節にできること ～ご家庭で取り組んでみませんか～

芸術の秋 スポーツの秋 食欲の秋 読書の秋・・・と、いろいろな秋があります。各ご家庭でいろいろと取り組まれていることと思います。さて今月は、とても参考になる新聞記事がありましたので皆様にご紹介いたします。ちょっとした隙間の時間をみつけて本に親しむことは大切なことだと思います。

毎日新聞
10月29日号より

家読

私の暮らす自治体で、「文の日」にちなみ、毎月23日を「家読(うちよみ)の日」とし、家庭の本を通じた時間を勤めてから、約1年がたとうとしてい

る。昨年、ふと、この取り組みを知り、とりあえず「積ん読」になつていた本を思いきって整理した。以来、本のある生活がいつそう身近になってきた。読まないで置くままの本よりも、今の自分が読みたいと思える本を、一冊一冊味わうことの大切さを感じる。

図書館通いも、4歳の長男と1歳の次男とともに、毎週の恒例になってきた。何度も何度も借りたくなる一冊に出会え、ついに購入を決めたこともあった。また、司書の方のお薦めの絵本から、季節にぴったりの一冊を知ることができ、絵本の世界とともに四季の移ろいを一層感じるようになった。

1年の間には、バタバタして、家で読み聞かせの時間を持つ余裕さえない時もある。兄弟げんか、玩具や絵本の取り合いもしょっちゅうで、毎日へとへとに

疲れ果てることもある。

そんな時は、家での読み聞かせは諦め、お出かけの時に絵本を忍び寄る。電車を待つ間に一緒に読むこともある。外に出ると新鮮で、親子で落ち着いた時間が持てることにも気付いた。

我が家もタブレットやテレビの力も借りる、ごく普通の子育て世代だ。それでも同時に「家読」を通じて得られる豊かな時間を、これからも大事にしていきたいと感じる。この秋もどんな一冊に出会えるか、楽しみだ。

神奈川県大和市

パート・33歳



心温まるお父さん・お母さんのお話から学びました

先日、あるファミリーレストランで食事をしていた時に、隣の座席から次のような会話が聞こえてきました。その席には見た感じでは20歳代の両親、6歳ぐらいの男の子、生まれて数ヶ月の女の子の赤ちゃんがいました。

- 男の子 「ねえねえ、なんで前はみんな僕にいっぱい話してくれていたのに、ひろみ(妹)が生まれたらひろみのことばかり見るの？僕はくやしいよ。」
- お母さん 「それはね、ひろみが家族の中で一番弱いからよ。ひろみは一人では何もできないし、泣いて教えることしかできないの。だからよ。」
- お父さん 「たかしが悔しいのは当たり前だよ。よく話してくれたね。たかしも最初はそうだったんだよ。お父さんとお母さんはお前のことをずっと見守ってきたんだよ。お前は赤ちゃんの頃に比べたらすごく強くなったんだ。今度はお前がひろみを守って欲しいんだ。」
- 男の子 「僕は強くなっているの？」
- お母さん 「もちろんよ。あなたは守られる側から守る側になったのよ。妹はもう少し大きくなった時に必ずあなたのことを頼ってくるのよ。その時にしっかり守ってあげられるように、今から心の準備をしておいてね。お願いします、お兄ちゃん。」
- 男の子 「僕はお兄ちゃんだね。ぼくひろみを守るよ。でもたまには甘えさせてね。だからデザートにプリンたのんでいい？」
- お父さん 「おいおい・・・」 このあと注文していました。
- 子どもから出た素直な気持ちを一旦受け止め、どのように返すかで子どもを成長させるか、止めてしまうかが決まります。何気ない会話でしたがこの両親から学びました。